

昭和二十七年六月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

（通第三十九号）

慈光

第四卷・第六號

目次

釈迦微笑の素懷……………	花田正夫（1）
無碍の一道……………	福島政雄（3）
凡秃ノ「ト」……………	長岡高人（7）
悪人と思へぬ程の悪人をこそ……………	松村繁雄（12）

提婆のそのかしの如く怒つた阿闍世は、父ビンバシヤラ王を七重の獄に深く閉ぢ、臣下の者誰れ一人として出入を許さず、食を絶つて了うた。母后韋提は百万手をつくし、真情を吐露して太子の心の和ぐやうにつとめたことであらうが、貧欲と瞋恚に狂うた太子の心は頑としてひらかれぬ。遂に、せめて王の露命をつなぐために祕かに食を獄中に運んだが、三七日の後太子がそれを知るところとなり、韋提は頭髮を糶掴みにされ劍を擬せられるといふ破目におちた。

「何ぞそれ痛ましき哉。頭を撮つて劍を擬す。身命たちまちに須臾にあり。慈母合掌して身を曲げ、頭をうなだれて兒の手につく。夫人この時、熱き汗あまねく流れて、心神悶絶す。嗚呼あはれなる哉、恍惚の間にこの苦難にあへるを」

と善導大師は韋提の心事を悲憐されてゐる。幸にも危急を知つた耆婆・月光の両大臣の捨身の諫言によつて生命だけは助けられたものの、韋提は遂に宮殿深く幽閉の身となつた。

韋提の苦悶はどん底に達した。一室に閉ぢられてただ愁憂憔悴するばかりであつた。夫王の身を思ひ、我身の行方を煩ひ、最早佛にお遭ひすることも出来ないことを悲しみ、悶え

はずには居られない胸の切なさ、哀しさに、覚えすしらす訴へるのである。だから愚痴には答は無用である、その切ない心を洞察して、愚痴のありつたけを聞きとつて下さる方一人あれば、自然に愚痴はおさまり、明るい光が射して来る。默然として韋提の愚痴を責め玉はず退け給はず、涙も悲憐して下さる佛心の広さ深さに、韋提の心も漸く口を取り返してゐる。

夫人は佛に向ひ奉つて五体を地に投けてひとへに哀れみを請ひ「私は現世に樂しむべきものは何一つありません。拙悪の世は地獄・餓鬼・畜生がみちみちて居りまして、善くないともがらばかりであります、どうか憂惱の無い国に生れ度うございます。清淨の世界をお教へ下さいませ」と言上した。

善導大師はこの韋提の言葉を解されて「真心徹到して苦の娑婆を厭ふ」と註せられてゐる。真心の徹到とは佛心の徹到である、韋提の求めであるが、それは凡夫の心としてはどうしても出て来ぬ、佛心の建現を大師はそこに感得せられたのである。即ち我々普通の考では、自分ではどうにもならぬが、威徳不思議な佛陀の影現を仰いだのであるから、どうか阿闍世の心を和けて下さるやうに、夫王の生命を援けて下さるやうにと願ふのが當である。然るに夫人はさうしたことを求めず、むしろ人生そのものに絶望してゐる。それは一人子である阿闍世の心を如何とも為し得ぬばかりか、必死の努力が返つて殺害せられると言ふ破目におちた、そこに母親としての無力さ、微塵もよくすることの出来ない身に絶望したの

に悶え、苦しみに苦しんだ挙句に、遙かに靈鷲山に向ひ、佛を礼し奉つて「阿難と目連を派遣して下さるやうに」と雨と注ぐ涙の中に佛に請ひ奉つた。其の有様は泣きじやくり泣きじやくりして面をあけることも容易でないと云ふ始末であつた。

やうやくのことで韋提が顔をあげた時、驚いたことには、佛陀は眼の前ですでに影現せられ、御身は紫金色に耀き、百宝の蓮華に坐し給うて、阿難と目連は左右に侍し、天人は天華を雨して供養し奉つてゐるではないか。佛は常に一大事の因縁なくしては動き玉ふことはない。直に靈鷲山上の説法をやめられて夫人の前に影現される世尊は、韋提の上に一大事を感じ給うたのである。

夫人は佛を見奉るや否や、髪飾りを自ら絶ち、立ち上るかと見るや、忽ち大地に身を投げつけて、号泣しつづけながら「過去世に如何なる罪があつて此の惡子が生れたのでせうか。佛は何の因縁で提婆を眷属に持たれたのでせうか」と訴へてゐる。これが凡夫韋提の愚痴の有りつたけである。一語も発し給はず、ただ聞きとられる佛陀の悲心、御眼に涙が宿つてゐた。愚痴とは言うて詮ないことである、然しそれを言

である、善導大師の二河白道の譬はその中心をこの韋提の心に置かれてゐる、進みもならず、退きもならず、止まるも暗である。

爾の時世尊は眉間から白豪の光を放ち給うて十方世界を照らし、その光が還つて佛陀の頂で金台をなし、その光の中に十方諸佛の淨土が明らかに見えられた。韋提はその諸佛の淨土をちつと拜んでゐたが、やがて世尊に向ひ奉つて「諸佛の淨土は皆清淨で光明がありますが、私は西方彌陀の淨土に生れたいと願ひます、どうしたらそこに生れることが出来るでありませんか」とおたづねした。

私は今韋提の心に沈潜するに、世界中に種々立派な教が夜空の星の如く輝いてゐるが、すでに我力、我身に絶望してゐる夫人には皆高嶺の月であつた、唯一つ西方彌陀佛の淨土こそは、罪惡深重の衆生、無力無能の愚鈍の身をかねてしるし召しての本願から成就せられてゐた。そこに駄目な者を何処までも憐れみ給ふ大悲に自然に心ひかれて西方淨土を選んだのである。

一方釈尊の御心は、地獄餓鬼畜生が満ちてゐますと号泣して訴へる夫人の言葉にふれて「我佛を得んに地獄餓鬼畜生なき国を作らん」と四十八願の最初から御誓ひ下さる彌陀の本願が韋提の願ひのそのままに相應して下さつてゐる。更に第二願に「また三惡道に歸らしめむ」と誓ひ、第十六願の「不善の名を聞くこと無からしめむ」との御誓ひは、さながら韋提

一人の願ひに依じて下されてゐる。だから、黙々の裡に聞きとられる世尊は御心底に愈々明らか凡夫草提のための彌陀の本願が憶念せられてゐる。

その世尊の心底に憶念せられる彌陀の淨土に草提の心はびたりと自づと定まつたのである。その時、釈迦佛の御顔に、微笑のひかりが現れた。太陽と地球を結ぶ直線上に月が現れる時日蝕となる、その刹那月の周囲から金冠色を放つ。彌陀釈迦・草提の心が一直線上に結ばれた時、釈迦微笑の素懐として金冠色が現れたのである。そのひかりがそのまま草提の生命にとほり限りない歓喜を與へ、やがて無生法忍、よろこびと信心とさとの三つを得しめ給うたのである。釈迦の発

無 碍 の 一 道

今回は無碍の一道といふ題にいたしました。これは華嚴經に出てゐる言葉であります。先づこの經に説かれてある善財童子求道物語についてざつと申し上げませう。

奈良県磯城郡に文殊院があります、その御本尊は文殊菩薩であり、その脇士が善財童子であります。木彫の像が大變よく出来てゐまして私共もなるほどと思ひます。専門家に聞きますと、走つてゐる姿ださうであります、合掌してゐるお姿で、顔も非常によく出来てゐて、久遠の童魂をもつて獅

程になつてゐます。

さて善財子とは何かといふことが問題になりますが、もともと華嚴經は釈尊の成道といふことを主題にした御經でありまして、成道の心に映る一切世界の姿をうつし出されたものが華嚴經であります。成道の釈尊でありますから、おさとりをひらかれた釈尊であります。その釈尊の説かれた境界がこの御經でありまして、その三分の一が善財求道物語となつて居ります。して見れば成道の釈尊と求道の善財との間に何か大切なつながりがなければなりません、善財の求道は何かの表徴でなければなりません、それは成道の釈尊に始めて湧き出た永遠の求道魂を表徴したものであります。覺りをひらかれた釈尊は「これからだ」といふことになりません。そこには天地一切が求道の上の大事な縁となつて居ります。かうした心が成道の佛に始めておこされてゐる、これが善財物語であると思ふのであります、普通の考へでは、成道する、さとりをひらいたならば、ひらけるまでの求道はあるが、それからまた求道があるのであらうかと思ふのであります、さとりをひらく以前の求道は無碍の求道とは云へませんが、種々の障りやさまたげがあります。修養の上で申ししても、修養のためになるものには接するが、障りのものには触れない、よい者には近づき、悪い者から遠ざかる、これが初歩であります。然し修養といふ場合でも徹底したものはそんなものでもありません。どんなものでも大事なたよりになるといふことでなければ眞の修養とは云へません。成道の釈尊の求道魂の

遣と彌陀の招喚の慈声を草提はここに感得して白道の旅人となつたのである。これひとへに彌陀釈迦二尊の悲心の徹到である。

「淨邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機あらはれて釈迦草提をして安養を選ばしめ給へり」と親鸞聖人の讚仰せられるところである、そしてそのまま「これひとしく権化の仁、苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆誘・闍提を恵まんとおほしてなり」と、聖人御自ら、苦惱の群萌・逆誘・闍提の輩と自覚し給うて、草提と共に極惡の凡夫に光被せられる彌陀久遠の慈光と釈迦出世の本懐を感佩せられてゐる。

福 島 政 雄

子奮迅する、しかも敬虔な姿がよく現れてゐます。これが、これからお話す善財童子の姿の彫られました、日本で唯一のものであります。

華嚴經には四十、六十、八十華嚴とありまして大部な經典であります。その六十華嚴や八十華嚴のあとの三分の一ほどが、入法界品といふ題になつてゐまして、入法界とはみよりの世界に入るとの意味であります。これが善財童子求道の過

前には天地一切の如何なるものも、以前には碍けであつたものも大事な縁となり、善知識となる、成道の釈尊においてそれが現れて居ります。何ものも求道の碍けとなるものがないそこに無碍の一道が出て参ります。

華嚴經の入法界品と、それまでを二つに分けて、前編と後編としますと、前編は釈尊のさとりの中に映る天地人生あらゆるものの輝いてゐる姿であります、寂かに釈尊の心におさめ入れられてひかり輝いてゐる。この前編の中心は、海印炳現三昧と云はれてあります。大海の水が靜かに澄み渡ると、世界の萬象が、そのままの姿で海の鏡にうつる。さとりをひらかれた佛の前に、天地一切が如実の姿で釈尊の心におさめ入れられ、莊嚴された美しい世界がひらめいてゐる。天地人生と釈尊が一味になつてゐるのであります。

華嚴の釈尊は毘盧遮那法界身であつて、奈良の大佛がそれでありませう。天地人生にみち渡る廣大無辺の生命とひとつになつてゐる釈尊の姿、つまり法身佛がそこに現れてゐます。それが飽く迄も寂かであつて、然も大活動があるといふ世界であります。非常に寂かに一切が攝められてゐる、その根本に大活動が含まれてゐる、さうした姿であります。

佛教は消極的でないといふと云ふ攻撃をうけますが、華嚴經を讀んで下さい。根本的消極に入つて大積極をうつし出されてゐます。佛教ではこれが大切なことであります。佛教は消極主義ではありません、消極に徹して湧き出てくる積極を善

財童子で現されてゐます。善財童子は海印炳現三昧の寂けさの極みから獅子奮迅三昧となつて出てゐます。これが入法界品の根底の三昧であり、そこから善財子と云ふ少年が、獅子奮迅三昧を目に見える姿で現してゐるのであります。

もう一つ華嚴經について考へてゐますことは、華嚴經を見ると積尊は法身佛として現れてゐるが、殆んど徹頭徹尾沈黙である、外の經では法華經でも積尊は三昧に入られてゐるが、靜かに立つて説法されてゐて、三昧は説法前の心を靜められる境地であります。ところが華嚴經では徹頭徹尾三昧に入つたきりで、一切がその三昧中の出来事となつてゐます。淨土經の根本である大無量壽經にも華嚴三昧といふことが出てゐますが、大無量壽經と華嚴經とは大切なつながりがあります。華嚴經も三昧、大無量壽經も三昧で、共に非常な寂けさの中に大活動が演ぜられてゐる姿を現してあります。

さて善財童子の求道は何処から始るかと申しますと、善財童子が文殊菩薩に出会ふところから始ります。文殊菩薩は智慧の菩薩であります。文殊に遭つて智慧の光に我身の照らし出されるところから求道が始つてゐます。それは積尊の獅子奮迅三昧中の出来事となつてゐます。

文殊に善財が遭ふ場所は、それは過去の佛の御廟がある前で善財が文殊に遭ふのであります。ところが東大寺に華嚴經の五十五所繪巻がありまして、善財の求道物語の姿を描かれてゐますが、その始めの善財が文殊に遭ふ場所を見ますと、

と云ふ有様であります。又物おしむする心や、ねたむ心やに縛られて餓鬼道にひとしく、そのうちに私は老病死と云ふ苦が逼つて居り、あいかはらず愚痴であつて、暗黒の世界をつねにめぐつてゐます。これが私の暗黒そのものの生命の姿であると思つきました」

と自分の暗い淺ましい姿を申し述べて、次に

「圓滿大悲の御方、清淨智慧の日の光をもつ御方、この私の煩惱の火を消して下さるやうに、私を憐んでどうか救うて下さるやうに。大慈大悲の智慧の光は、如何なる煩惱の世界をも照らし給ふものと思ひます。月の光のやうに照らして下さる文殊菩薩よ、どうか私を照らして下さるやうに」

と申述べてゐます。求道の第一歩はここにある。文殊の智慧の光を以て自分の煩惱の闇を照らし給へと、自分の生命の根本の歎きを文殊の前に打ち明けて申述べてゐます。これが善財童子の求道の初で、同時にこれは私共人生における求道の初であります。

さうするとどうでせうか。ここに積尊の成道の場面を思ひ起すのであります。菩提樹下に端座された積尊に沢山の悪魔が大拳して攻めよせて種々のさまたけをする、然し積尊は悪魔をすべて降服させてすべて退散するといふ風になつてゐる。然し成道と共に始る求道の第一歩は、靜かに我身を振り返ると我身に暗いものが一杯あるといふことを先づ見せしめられて求道が始る。成道は悪魔の退散であります。求道の第一歩では、自分の姿をかへり見て下さつてゐる。このこと

過去の佛の御廟がさび果てた、荒れはてたやうになつてゐます。經文ではさうではないのですが、画家が斯様に描いてゐるので、そこに文殊に遭つた善財の心持を現してゐます。

何一つ頼るものもなく、佛は過去佛で荒れはててゐる、人生はさびしく、たよるものもない。經の文面では文殊が覺城の東の娑羅の林の中の大廟の前に来ると大勢群り集つて来るを説かれてありますが、何百人居ても、返つて多くの人々に取りまかれてゐるほど淋しいものであります。だからこの画家は善財の心の中に入りこんで描いてゐます。

佛の廟所は荒れはててゐる、そこで善財は文殊に遭ふのであります。文殊に遭ふとは、文殊の智慧に照らされて自己の姿が始めてわかりはじめ、自己の姿が見え始めると善財は文殊に求道の心持をのべるのであります。その時自分の生命の姿を打ち開いて申すのであります。

「私は三つの迷を自分の城廓として居ります、高慢な心で自分の生命の周圍に垣をめぐらし、又諸々の迷の世界が私を敵として居つて、愛欲と言ふ心が深い壘をなして私の生命の周圍を廻らして居ります。又愚痴の闇で覆はれて居りますし、三毒の煩惱が火のやうに燃え立つてゐます。私は悪魔を君王としてそれに仕へてゐます。自分の心をかへり見ると何もわからぬ無智の少年の心であります。この私は三毒の煩惱にしばられて、へつらふ心、曲りくねつた心のために正しい修行が出来ませぬ。又人を疑ふ心がどうしても除かれず、智慧の眼をさまたけて居ります。従つて種々な邪の道に流転す

は私共の大きな導きになるやうに思ひます。私共はこれで自分の心の問題が一段落ちついたとなると、今度から立派にやるぞとなると云ふ風であります。積尊の成道がかうであると見ますと、私共が信仰にめぐめて、これから立派にやつて行けるなどと云へるかどうか、深くかへり見させられることでありませぬ。

善財童子は文殊菩薩に以上のやうに申述べると、文殊菩薩は、ゆつたりと靜に、善財に向ひ、その姿をつくづく眺めて、かういふことを言ふのであります。

「実によいことである。無上眞道を求めるといふ心を起して善知識を求め、近づいて、菩薩の道を求めようとしてゐる。人間は志を立てると云ふことが大切である。お前が無上の菩提心を起したことは最も善いことである。これは菩薩として第一に大切なことである、又これは即ち佛の一切智を具へる所以になるのである。

それで善知識を求めて近づき、親み、敬ひ一心に供養して何処までもこれに飽いたと言ふ心になつてはいけなないのである。そして善知識に対しては、菩薩の道を修行するには、どうすればよいでせうか、どうすれば菩薩の行を満足し淨らかにすることが出来るでせうか、又どうすれば菩薩の行に徹底することが出来るでせうか、又どうすれば菩薩道と云ふものの縁となるでせうか、又どう云う風にす

れば菩薩の道と云ふことを益々広めて行くことが出来るのでありませうか。かくて菩薩が普賢の行を身に具へるにはどうしたらよいでせうか。以上のことを一貫して善知識に申し述べよ」

かう云う様なことを述べて、文殊菩薩が善財童子を讃めまして、これから先の道を求めるについて励まし、且つ導く所の言葉としてゐます。

善財童子は文殊菩薩の導きによつて南の方に道を求め、南へ南へと行つて次から次へとたづね、五十三人の善知識にあ

凡 禿 ノ 一 ト (一)

凡禿さんの笑ひ

長岡高 人

去る第十回凡禿忌の席上、参会の諸氏からいろいろと追懐談が述べられた。そしてその所感の殆んどは異口同音に、凡禿さんの明朗な笑ひを讃嘆されたことであつた。

ところが、最後に立たれた法友の大先達四戸慈文翁が、老体病軀を演壇に運ばれ「清水君の笑ひの裡には、萬斛の涙がある」と、声を励まして喝破された。私は、翁の短い、しかもやや言葉の御不自由なそのスピーチを拜聴して、言外に溢れる緊迫感に強うたれて、肅然襟を正さずにはをられなかつた。翁は、法弟凡禿さんの十回忌に当り、隠然黙居すること

ふのであります。かやうに五十三人を歴訪するのであります。その間、善財の後を影の形に添ふやうに善財童子に添うてゐるものは文殊菩薩であります。善財は文殊と別れて道を求めて走つて行くのですが、文殊菩薩は善財について離れずに何処までも一つになつて行くのであります。文殊の智慧が善財童子求道の底力、或は後から照らしてゐる光となつて居ります。

己下次号、

能はず、夜分にも拘らず風雨を冒して出席せられ、然も先立つて逝ける法弟の真情を訴へるために、憔悴した体に鞭打つて、この真摯卒直なスピーチを試みられたものであらう。

覺者の説法を獅子吼と称すると聞くが、まことに翁のこの一言こそは、老獅子の憤然たる咆哮ともいふべき、嚴肅でも悲壯な感慨があつた。翁はまた、日蓮上人の「鳥は泣けども涙なし。日蓮は泣かざれども、心に涙かはく暇なし」との文をも引用された。このお言葉もまた、実に人間凡禿さんの胸中にひそむ萬斛の涙を知るものの言といふべきであつ

た。そして何はさて措き、今は亡き凡禿さんは、この真にそのれを知るもの一言に莞爾として満足の微笑を浮べてをられることは、いささかも疑ふ餘地がないといふ氣がしたことであつた。

ことに凡禿さんの明朗な笑ひは衆人の讃嘆して止まないところであつた。勿論迂餘曲折を極めた四十九年の人生苦歴を秘めた凡禿さんの笑ひはまたそれだけに複雑多彩で、深刻な内容を包んでゐた。そして時に呵々として大笑し、時に温和な笑ひとなり、また時には疲肉な微笑ともなつた。だが然しそのいついかなる種類の笑ひにおいても、決しておごりたかぶつた感じや、ひねくれていぢけた響きは微塵も聞く人の心に與へなかつた。この順境にたかぶらず、また逆境にいぢけず後暗い陰影のいささかも含まれない、明るく温かく、懐かしい凡禿さんの笑ひが、あのやうに広く衆人を感動せしめひきつけていつたものであらう。

凡禿遺稿集の巻頭に「しかも、その一生涯を通じて、凡禿さんのあるところ、常にその隣人はおのづからにして救はれ、おのづからにして喜びを知り、おのづからにして眼がひらけ、湧然として勇氣が生じ、澗然として道が拓け、いつの間にかひとしく踊躍歡喜、佛恩報謝の喜びを味はしめられるのであつた」と誌されてゐるのは、誠によく信仰生活者としての凡禿さんの、稀有な深刻な内容を持ちながら、しかもある種の明晰な諦観を包んだ、あの印象的な笑ひの面目を伝へてゐると思ふのである。

事実、當時を回顧すれば、甚だ扁狹で内向癖の青年であつた私が、もう自分の頭ではどうにもならない問題を抱へて、鬱々として凡禿さんを訪ねたり、または一知半解の生嚼りの知識を振りかざして、猛然と喰ひ下つて質問してやらうなどと、稚氣満々氣負い立つて凡禿さんを問うたりしたことも、実に一再ならずあるのだけども、そのいづれの場合にも、凡禿さんからはこれといふ断定的な結論は聞かされた訳でもないのに、例の通り私の心の底を見通すやうに隻眼を光らせながら、時に大笑し、時に微笑しつつ、飽むことなく論議される、その雰圍氣に包まれてゐると、何時の間にか、その明朗で軽妙な氣分の裡に引き込まれて、凡禿さんの笑ひに同調せざるを得なくなり、知らず識らず帰途にはもう軽やかな足どりで、明るく歩んでゐる自分を見出すことであつた。そしてこの明るさ、安らかさが、何としても理論では満足させられないのに、實際問題として私が凡禿さんからどうしても離れることの出来なかつた法縁の絆であつたと思ふのである。けれども凡禿さんの笑ひの裡には、萬斛の涙があつた。健康、金、地位、名譽、後嗣者等々、どの角度から見ても、決して笑へぬ現実生活を背負つた人の、その笑へぬ人生をしつかりと背負ひ抜いた心の底から湧き出る、内面的な深い笑ひであつた。実に悲喜交々の人生の両極端は、涙と笑ひとによつて代表されよう。そして人生の真相は、この涙と笑ひとの両面を一つの生命の裡に統一的に含み包んでゐるところにあるとも云へるのではあるまいか。まことに凡禿さんの一生

は、涙と笑ひの人生が、お念佛の信仰によつて、一如に媒介融合されてゐたと思ふのである。涙—念佛—笑ひといふのが凡禿さんの笑ひの個性的な面目ではあるまいか。お念佛はそのまま如来の絶対の御智慧そのものであると教られる。智慧は人生の諦観から生れると云へよう。実に正信念佛によつて、人生の苦惱の涙の依つて来るところを諦観せしめられて、それを内面的な喜びの笑ひへと質的に転向せしめていつたのが、凡禿さんの生きた信仰の力であつた。かうして相對的の苦惱の涙が、その原因を深く諦観せしめられることにおいて、全く對蹇的な絶対の法悦の笑ひへと転換せられて、始めて人生の苦惱が、根本的に救ひ攝め取られたと云ひ得るのではあるまいか。そしてここにまた、お念佛は、そのまま人生の苦の本を抜いてまことの樂を興へたまふ如来の無限の御慈悲そのものであるといふ深い真実もまた体験の上に味はしめられるやうである。

凡禿さんは、実は世の所謂倒産兒であつた。勿論それは決して凡禿さん自身の責任ではない。ただ父祖伝来の老舗が、時代の重圧のために倒産せざるを得ないといふ破目に、丁度凡禿さんが廻り合せたといふだけのことには過ぎない。しかし、人間凡禿さんとしては、そのやうな憂目を自分の世代において引き受けなければならなかつたといふことは、どのやうな身心の苦惱であつたか測り知れない。しかも凡禿さんは、既に先祖御在世の頃に整理さるべきものを、わざわざ先代歿後の自分の世代まで持ち越して、この倒産の苦惱をみつ

りは変りがないのだと味はされたとき、悲しみの涙が勿体ない有難さの涙に變つてゐた。」

そして漸く市内中津河畔の寓居を見つけて、法友諸氏の協力で引越しを終へ「新生」の第一歩を踏み出された。

「今から約二十年ばかり前から続けて来た重苦しい生活から逃れたい逃れたいと念願してもどうにもならず漸く今日になつた。

先づ母や妻の承諾を得て、持つてゐる総てを投げ出し、足らぬながらも皆様方の御諒解を得て解決をつけようと、いよいよ決行にとりかかつた。何しろ永い間の因襲やら隋性やらで、仲々思ふやうに事が涉らぬ。しかし周囲の皆様方の厚い御親切によつて、ある閑靜な市の中央の川辺に寓居を見つけて去る二十三日に転居した。(中略)

かうした場合になれば、お人様方は離れて了ふとはよく人から聞く話だが、逆に皆様方がお見舞ひに来て下さる。何とした有難い事だらう。いつぞや聞光誌上に、中川法兄が書かれた病床記に、どこからか現れて来る御親切や、普段には何処にも見出しかねる数々のものが、続々と現れて不思議でたまらないと書かれてあつたが、全くそれを深く味はれる。

引越の当日、親類や法友の方々の沢山のお手伝を頂いだ、お蔭様で夕方までに皆片付いて、夜は一同で靜にお正信偈をあけさして頂いて、元氣よく新生活のスタートを切る。何がなくとも、お念佛ばかりは私の生活の力になつて下さる。一かうして移り住んだ河畔の借家は、当時の家賃で月三十円

からの上に担はれたのである。それは勿論、先代慈父に對する無二の孝心といふことにも依るのであらう。だがしかし、その理由はともあれ、実業家として父祖伝来の自家の看板を自分の手で下して、家財を整理して人手に渡してしまはねばならぬといふことは、どれ程身を切られるやうな悲痛事であつたかは、到底私などの想像も及ばないことである。けれども当時凡禿さんは「自分の苦しみといふものを単に主觀的に苦しむだけでなく、その苦しむ自分の姿を客觀的に見させて頂く立場を興へられてゐることは、何とも云へない有難いことだ」と洩らしてをられた。

かうしていよいよその老舗を明け渡さなければならぬ場面面に立ち到つた時、凡禿さんは次のやうに感想を述べてゐられる。

「住み馴れたところから、引越しせねばならぬことになつた。移るべき処を深すべく毎日のやうに市内をうろつき廻つた。仲々に思ふやうな家を探されなかつた。間取りや家賃や明りの具合が折り合はぬ。足を棒のやうにし家に帰ると、毎日のやうに今日も家を明けろと請求されたと家人に云はれるこの時程淋しい泣きたくなるやうな氣持になつたことはなかつた。これ程市内に家が沢山あるけれども、一体己れの住む家が無いのか、と引越しの苦勞をしたためしのない自分にとつては、不覺の涙が知らず知らず頬を伝つてゐた。

さうだ私の住むべき、安らふべき場所は、ただ如来のお胸の中より外になかつたのだ。いついかなる時でも、ここばかりだつたとの事、それを奥さんが「月三十円もの家賃を出すのは」と云はれると、凡禿さんは「この河畔のいい景色を見ろ先づ朝の景色が五十錢、次に夕方の景色が五十錢で、一日一円宛で月に三十円、後は無料で入つてゐるやうなものではないか」と云はれたといふ。「何でも私共の暗い氣持をこのやうに明るい方へと轉換してくれました」とは奥さんの御述べ懐である。

またこの頃の隨想にこんなのがある。

「自動車の騒音から、水のせせらぎを聞く河辺にと居を移して、同じ市内にもまたこの別天地あるに驚く。夜半に目覚めて、かすかな水の流れの音に、雨かと疑ふ。

同じ人の世にありながら、しかも同じ町に住みながらも、僅々居を隔ててさへも、いまだ知られざるこの世界を味ふ。ましてや、心の世界においておや。自我主張の世界を作りつつ、その自我主張なるを知らずして、広き世界をみつから狭めて、人を憎み世を呪ふ。

今如来慈光の恵みを受け、念佛のもとに広き世界を見せしめられて、餘りにもかけ隔りたる心の世界に、ただ驚くのみ。偉なる哉、本願の世界、壯なる哉、念佛の世界。居変らず、人変らず、ただ心の如何によりて、世界の広狭を作り出す」

このやうにして凡禿さんは、人生萬事について、実によく笑つた。いやむしろその人生を明るく笑い抜いた。しかしそれを裏返して見れば、凡禿さんは実にその人生を泣き通した

ともいなければならぬ。ここに凡禿さんの信仰遍歴や生活苦歴の事実を知悉して来られた四戸翁が「清水君の笑いの裡には、萬斛の涙がある」と断言叱咤せられたお言葉の底に、千鈞の重みを感じられる。そしてこの凡禿さんの明朗な笑ひの源泉が何であつたかは実に次の一文によつて明瞭であらう。

「明朗とは、われ等が欲求する最後のものなり。特別に作り出す世界にはあらず。われ等が繫縛の糸の解かれたるこそ、即ち明朗の姿にあらずや。われ等が繫縛とは、他なし。迷ひなり、迷ひとは如何、そは貪、瞋、痴の三毒にあらずや。

覺者の放ち給ふ光に三種の働きあり。清淨光、欲喜光、智慧光これなり。清淨光は貪欲を、欲喜光は瞋恚を、そして智慧光は愚痴を消滅して下さる。

覺者の光をひたすらに受くるところ、これ朗かなる世界たるや論なし」。

私には無論これ以上に凡禿さんの笑ひの本質を分析しようにも、最早力の及ばぬことである。ただ最後に私の直接に觸れ得た、凡禿さんのあの独特の個性的な笑ひの裡には、深刻な悲歎の涙に濡れた内面生活があつたといふ事実の一つを記すに止めたい。

これは凡禿さんが私の家に訪ねて見えた時のことであつた。例の笑顔で氣軽に入つて来られた凡禿さんは、佛前でしばらく読経された後、靜に末灯抄を音読し始められた。私は

これも今は既に十数年前の思ひ出となつてしまつたが、しかしあの末灯抄を拜読してひとり激しく滯泣された凡禿さん、私には永久に忘れられないことである。そして凡禿さんとは比較にもならぬ程に無反省極まる毎日の生活を送つてをりながら、それでいていくら末灯抄を拜読してみても、涙一

悪人と思へぬ程の悪人をこそ

松村 繁雄

ああしよう、斯うしようと思つてはいるうちに昨日も過ぎ今日も過ぎ、明日と見る日もいまに又過ぎ去る。不断に刻む時計の音にわが生命はどんどんすり減されて行く。時計はネジさへ巻けばいつまでも動くが、我が生命には嚴肅な終点がある。年が改つて六歳の孫が七歳になつと云うて喜ぶけれど、これとても限りある孫の生命が一年だけ減らされた記録である。五十六歳になつた自分はと仮りに七十まで生き得るとしても僅かに十四年を残すのみ、然も無常の嵐は今宵をも期し難い。唯今の、この命の一駒こそかけがへのない大切な命であるではないか。

然しこの一駒一駒の生命の時を考へてゐるかといふと「儲けよう、損をすまい、人に敗けまい」等々の煩惱にこそ使はれてゐて、思うやうになつたと云うては喜び、ならぬと言つては愚痴をこぼし、浮いて喜んだり、沈んで残念がつた

凡禿さんの後に座つて、それを拜聴してゐたが、その音読は可成り長く續いて、しかも非常な熱を帯びていつた。これはこの頃凡禿さんは、前述の財産問題で御苦勞をしてをられる最中であつたから、或はそれらの事を思ひ合せて、深く胸底に觸れて、感に堪へぬものが現れたのかも知れない。

そして第十九通目の半ば、「無明の酒に酔ひたる人はいよいよ酔を勧め、三毒を久しくこのみ食ふ人はいよいよ毒をゆるし好めと申しあうて候ふらん、不便のことに候。無明の酒に酔ひたることを悲しみ、三毒を好み食うて未だ毒も失せはせず、無明の酔も未ださめやらぬにおはしましあうて候をか。よくよく御心得候ふべし」との一節にさしかつた頃、凡禿さんの声は次第に涙にうるんで行つた。そして遂にその声が咽びとぎれたかと思ふと、突然感極まつて激しく泣かれた。私は全く突如として目前に起つたこの出来事に、ただ果然として何等の言ふべき言葉もなく、黙々としてひとり涙の中に沈んでをられる凡禿さんの背後に控へてゐる外なかつた。そして日頃一見洒脱輕妙な言動の凡禿さんに、この涙にかきかれて咽び泣く深刻な半面の生活があることに深く心を打たれて、私もまたおのづからに深い感動に沈んだ。

やがて懷中から手拭を出して、涙を押しぬぐはれた凡禿さんは、末灯抄の残りを靜かに読み終らされると、後の私を顧みて「いや、おれは、全く妻や母を犠牲にして、毎日かうしてゐるんでな。末灯抄を讀むと、もう何ともたまらなくなるよ」としみじみとして述べられた。

滴こばれようとしない私の頑固な心を、ひとり淋しく悲しむばかりである。心の底から自分の現実のあさましさに泣き切れない私は、また反面では、心の底から自分の現在の幸福に笑ひ切れない私なのである。

二六、一一、二五。

りしてゐる間にも、命の時は刻一刻と終黙に接近して行く。よしんば思ふやうに儲り、欲望が適つたにしても、この一刻一刻といくばくもない生命の消えて行く前にそれが一体何の役に立たう。

それのみか、人間として生きる上に一番大切な人様との交際において、又家内において、和言愛語でなければならぬのに、表面はさもまことのやうに優しく装ひ、円満のやうに飾られても、心底をたづねて見れば、詭ひと偽りの塊りであるではないか。相手が好意を持つてくれれば、此方も其の人を善い人好きな人と思ふが、善めてもくれず、好いてもくれないならば、たちまちに相手を厭な悪い人に思つてへだてて了ふ。そして内心では相手に何時も自分を認めてくれよとばかり要求し、その癖こちらは相手の缺點ばかりを数へ立てて、ああじゃ、かうじゃと批評をあげせかけて冷たく裁いてゐる。

編集後記

梅雨の候となりました。蛙声、螢火、地のはてばてを賑はして居ります。然し無常の嵐は遠慮会釈なく吹き荒んで居ります。私の家兄もかりそめの病に過ぐる日散つて行きました。又信友の一人は先日逝かれ、今一人は病床に重態と承ります。哀愁の最中に沈んで、善財童子、求道の第二の知識、海雲比丘の訓が身に滲みることあります。

「自分は十二年の間、海ばかりを窺察してゐる。時に鏡の如くなぎ渡る海、時に怒濤をかまく海、はてしなく広く、そこひなく深い海。岸边から段々に深くなる海。さうしたことを毎日観じてゐたら、或日のこと海面を覆ふ大きな蓮華が咲き出でて、其の華上に佛が紫金色の光を放たれつつ一切の衆上を救済せられてゐる尊容を仰いだ」

と語るのであります。親を失ひ兄弟法友を失ふ私には生死の海の年と共に段々深くなるのを感じ、時に順境らしい日は海面のなぎをよるこび、時に荒れ狂うては天地晦冥となりさうしたことはてしなく拡がり、底ひなく根ざしてゐる身を窺せしめられると共に、そこに久遠劫來の彌陀・観音・大勢至の救ひ救うてやみ給ふことなき尊容を仰ぐことであります。生死海に即してその全体を獲ひつゝしての如く救済の御手を感佩申すことであります。

▽「無碍の一道」は九十年の祖聖の生涯の根本の光でありました。その根源を華嚴經の法界品の善財求道物語において福島先生の信譽を存分に吐露して下さいました。我等白道の旅のよき指示を無限に頂くことであります。華嚴經の探玄記に詳細に説かれてあります。志のある方々の御味醜を併せてお勧め致します。先生は今度神戸教育大学の教授に転ぜられ、御住所も明石に移される由であります。

▽「凡禿ノート」は盛岡市鹿島下四ノ三の長岡高入氏の御胸心によつて頂きました。聞光録の筆者、今はなき清水凡禿居士の御信境をうかがふにこの上なき記録であります。長岡氏は盛岡市縣教育委員会に勤務せられ、御病身であります。それだけに健康におごる者の味ひ得ない信味を醸せられて居ります。御母堂様も痼疾御入院中と承つて居ります。障り多くして愈々徳多き姿を深く感じさせられます。

▽「悪人と思へぬ奴を」は山口縣仁保局区内仁保村の松村繁雄氏から頂きました。氏は去る五月御來庵下され、僅かの時間ながらお面接を得て、談合いたしました。大戦前まで今は亡き桃林師と共に法悦誌を發刊され山口・島根方面に法友を持たれた方でありました。御長男は戦病死され、病弱の御次男と御孫様を抱へ、苦学絶え間なき中に念佛生活を続けて居られます。

▽「釈迦微笑の素懷」は稠無量壽經拜読後の私の心に残る余韻であります。王舎城悲劇の最中に、愚痴の女人童提の救済こそ、我等凡

愚救済の大徳音であります。善導、法然の両師が随喜渴仰以つて生涯を培つて光闡して下さいました大道であります。家兄の死で編集がおくれ、又印刷所にも障りがあつて出版がおくられて申訳ありませんでした、おわび申します。

聚墨生

昭和二十七年六月十日 印刷
昭和二十七年六月十五日 発行

定価 一年金二百四(郵税共)
半年金拾七(郵税共)
一月一回十五日発行

名古屋市南区駈上町二ノ二八

編集兼 花田正夫
発行人

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷人 本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八

印刷所 千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八

一道會館 慈光社

發行所 振替口座番号 名古屋一〇四七〇番